

北海道大学図書館所蔵満洲語公文書史料について

中見立夫
東京外国語大学, 日本
東洋文庫, 日本

日本国内に所在する建造物、絵画、工芸品、古文書、歴史資料、彫刻、書籍・典籍、考古資料等の有形文化財のうち、歴史上・芸術上の価値の高いもの、または学術的に価値の高いものを、日本の文化財保護法に基づき文部科学大臣が「重要文化財」として指定した文化財が「重要文化財」である。必ずしも日本ないしは日本で作られた、そして日本人により日本語で書かれた文化財のみならず、たとえば東洋文庫所蔵文献でもジョン・セーリス日本航海記〈英語による自筆本／西暦 1614 年〉なども、「重要文化財」に指定されている。また龍谷大学図書館保管の重要文化財指定の「李白文書」（李柏尺牘稿）は、日本の西本願寺大谷光瑞が派遣した、いわゆる大谷探検隊の橘瑞超が中国東トルキスタン（新疆）地区のタリム盆地を流れるコンチ・ダリヤ下流の楼蘭遺跡で 1909 年ころ発見した、前涼の西域長史に任命された李柏が国王に出した漢語による手紙の草稿であり、書写年代は 328 年（前涼太元五年）と考証されている。極めて古い時期の紙と墨筆によって作成された手紙として貴重なものであるが、日本の歴史文化とは全く関係のない、中央ユーラシアに関する文化財である。

日本には学術的に価値の高い満洲語・モンゴル語などのアルタイ系言語で書かれた書籍・典籍、古文書が多く伝存するが、これまで日本の重要文化財に指定されたものは一件もなかった。だが 2019 年度に北海道大学附属図書館に所蔵される満洲語で書かれた「ナヨロ文書」が重要文化財に指定された。本韓国アルタイ学会に参加される諸氏はみな満洲語で書かれた文献・文書資料に関心をもっておられるだろうが、この北海道大学附属

図書館所蔵「ナヨロ文書」を実際に御覧になった方は少ないとおもう。その内容と由来を略述し、韓国にも同様の満洲語史料が伝存するかもしれないので、参考情報として御紹介したい。

1. 「ナヨロ文書」とは？

2019年度にあらたに重要文化財に指定された「ナヨロ文書」とは、指定されたときの日本政府文化庁の発表によると、正式な指定文化財の名称は「カラフトナヨロの惣乙名文書（ヤエンコロアイヌ文書（十三通）」）で、

カラフト西岸ナヨロの惣乙名（複数村落の統括者）をつとめたアイヌの氏族長の家に保管、伝来した文書群で、清国関係文書四通と日本側作成文書九通の計十三通で構成される。前者は十八世紀後半から十九世紀前半にかけての満文二通（一通は官印が押捺された檔案（公文書）漢文二通で、同国への進貢に関する内容をもつ。日本側作成文書は、江戸時代後期（十八世紀末～十九世紀中葉）のもので、最上徳内ら北蝦夷地（カラフト）探查に携わった人物による前記満文文書ほかを披見した旨の書付、ならびに函館奉行所、函館府発給の惣乙名職等の任命状の二種に大別される。十八世紀から十九世紀にかけてのカラフトアイヌと清国、日本との関わりを伝える極めて稀有な文書群であり、当該期のいわゆる北方世界の歴史研究上に学術価値が高い。中国・清時代、江戸～明治時代、二巻、国立大学法人北海道大学（北海道大学附属図書館保管）

とある。この史料は、上記文化庁発表にあるように、最上徳内が早くカラフト調査中に実見したもので、江戸時代より日本関係者に知られていたものであるが、十八世紀後半から十九世紀前半にかけての満文二通に関しては、北海道大学教授を務められ、韓国アルタイ学会とも関係の深かった故池上二良博士が論文で紹介している(1)。

II. 満文の「ナヨロ文書第一号」及び「ナヨロ文書第二号」の内容と史料的价值

「ナヨロ文書第一号」は乾隆四十年三月二十日の日付で、“*ilan halai ba icooha be kadalara meireni janggin*”つまり「三姓副都統」名で書かれ、同職印が押されており、“*too halai,halai da ok’opio.*”すなわち「陶姓の族長 *ok’opio*」および「むらの長（*gašani da*）、*tosokurdenggi*」に交付された文書であり、北京への朝貢の時期等を指示した内容である（2）。

「ナヨロ文書第二号」は、閏六月二十五日の日付で嘉慶二十一年に財物を賞賜するために来訪した“*niruijanggin neibungge*（佐領 *neibungge*）”が“*halai da siretumainu*”（族長 *siretumainu*）”に交付したもので、“*halai da alban*（族長の公務）”を果たすための証明として与えたものである。

当時においては、南カラフトのナヨロに居住していたアイヌ系集団のあいだでは、まだ「国籍」、「国民」という意識は存在しないうえに、清朝との支配従属関係も明確ではなかったが、かれらアイヌ系集団も、三姓副都統を通じて清朝との接触があり、京城へ進貢し、妻をめとるということがおこなわれていたことが、この史料を通じて分かる。東北ユーラシアにおける民族間関係と接触の実態を示す極めて貴重な史料であり、江戸期日本の北方探検家、最上徳内や間宮林蔵が江戸年間にこの文書をみて書き写しており、この文書の存在が江戸年間から知られていた。また明治年間には、白鳥庫吉によって日本語訳もおこなわれている。

日露戦争以降樺太が日本の領有下に入ると豊原の樺太庁博物館で保管されていたようであるが、1945年8月、日本の敗戦により、ソヴィエト軍が樺太に侵攻し、現地日本住民や日本の資産にも暴虐を加えると、「ナヨロ文書」はどのような運命をたどったのであろうか。

III. 北大図書館に「ナヨロ文書」が回収されるまで。

ソヴィエト軍が樺太へ侵攻すると、日本人は強制的に日本内地への引き揚げを命ぜられ、一切の日本の公的資産や個人資産の携帯・持ち出しも許されなかった。

当時、北海道帝国大学は理科系学部のみ自然科学系大学であったが、農学部植民学講座の高倉新一郎教授は日本におけるアイヌ史および北方史

研究の開拓者として著名で、かつ北海道帝大図書館で関係文献・資料の収集に尽力していた。樺太からの引き揚げ船が到着するようになったころ、ある朝、高倉が職場の北大に行くと、無名氏からの高倉宛小荷物が届いていたという。荷を空けると「ナヨロ文書」一括13件が入っていたという。誰がもたらしたかも不明で、北大にもたらされた経緯は、あとで高倉教授から文書の研究を依頼された池上教授が筆者の主宰する研究会で明かしたもので、一般には知られていない。恐らく一般の樺太在住日本個人ではなく、「ナヨロ文書」の価値を理解している人物が、凶暴なソヴィエト軍に接收・毀損されることを恐れ決行し、日本本土に持ち込むと同時に、あたらしい保管先として、「ナヨロ文書」の学術的価値を認識していた高倉教授のもとへと運んだのであろう。混乱のなかで、驚くべき学術的美談で、かくしてナヨロ文書は北海道大学図書館に回収され、今回、「重要文化財」に指定されるに至った。

おそらく、今後とも国宝・重要文化財の指定事業は続くであろうが、満洲語典籍・史料が指定されるのは、今回の「ナヨロ文書」が最初であるとともに、現在の「重要文化財指定基準」からみて、「重要文化財」に指定される可能性がある資料はほかにまずない。

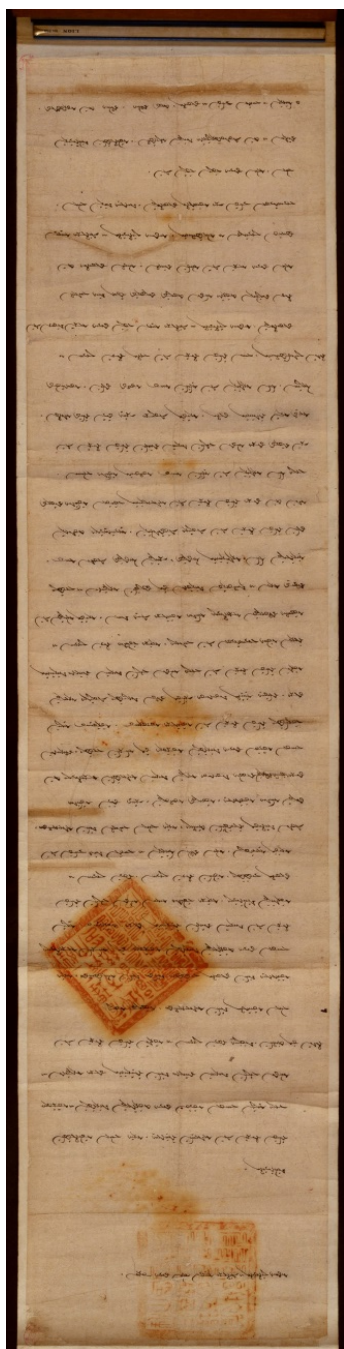
なお「ナヨロ文書」の満洲語文書部分は、以前は、高倉が創設した北大付属図書館北方文化資料室入り口のケースに展示されており、また北海道博物館にもナヨロ文書の複製が展示されていた。今回の重要文化財指定以降、適宜、展覧会等で展示される機会があろう。機会があれば、是非、実物を御覧いただきたい。

References

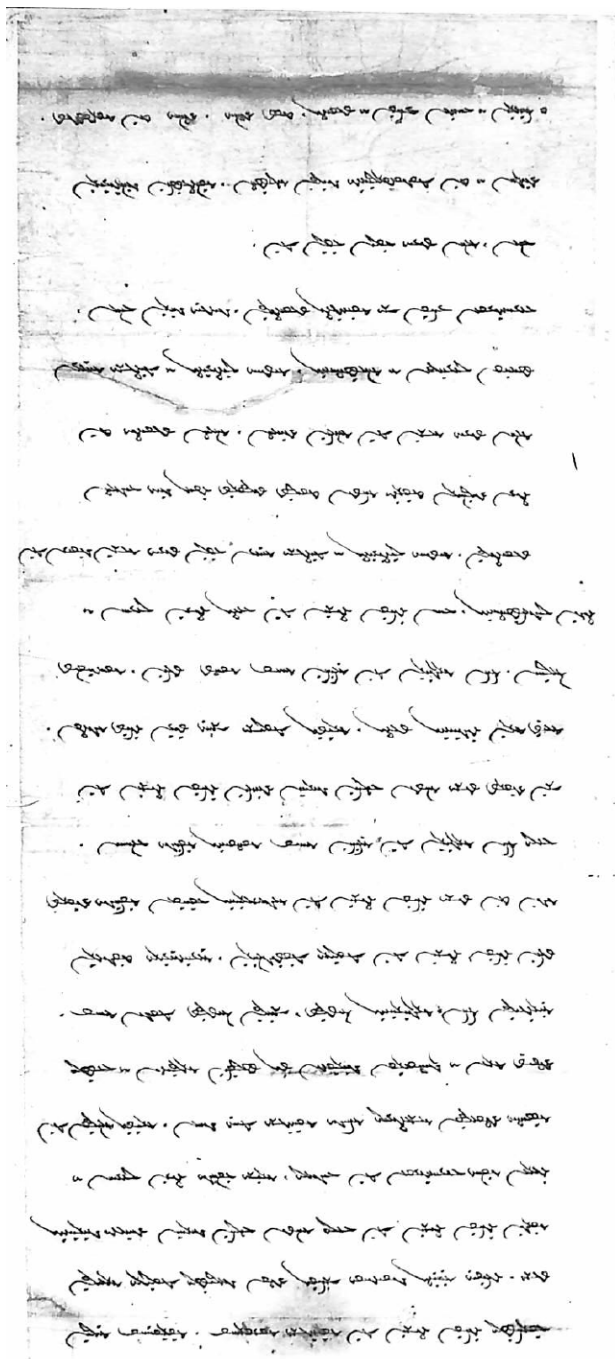
- (1) 池上二良「カラフトのナヨロ文書の満州文」『北方文化研究』3号（1968年3月）、179-196頁。のち、訂正のうえ、同氏『ツングース・満洲諸語資料訳解』（札幌：北海道大学出版会、2002年）、444-462頁、に収録。
- (2) はじめ池上は“ok’obkio.”と転写したが、のち松浦茂の考証に従い、“ok’opio.”と人名を訂正した。

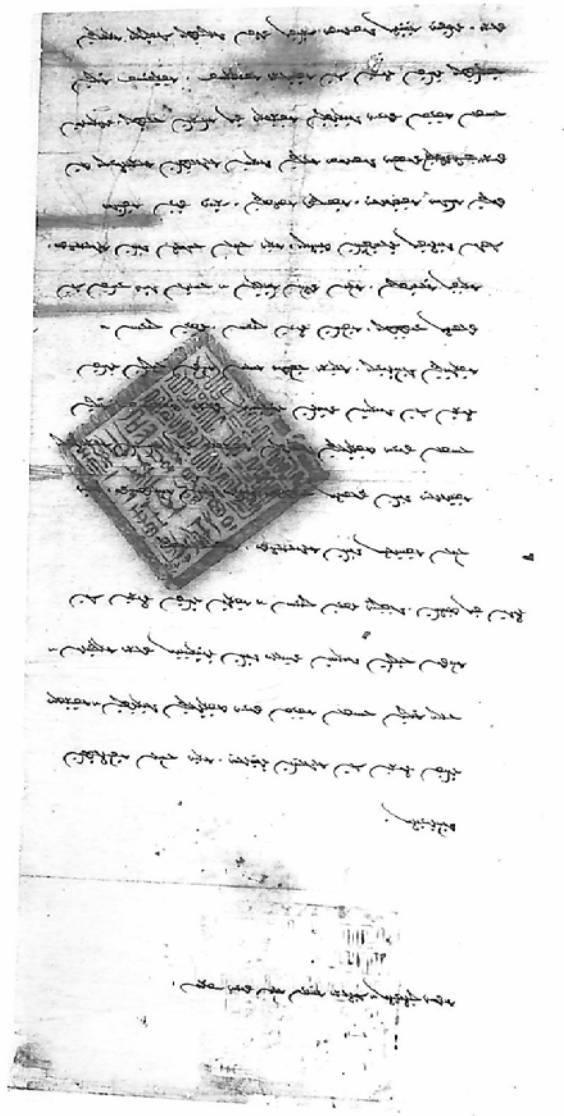
15th Seoul International Altaistic Conference, July 16-17, 2021

Appendix I. The Manchu document of the Nayoro document (No.1)



Appendix II. The photoprint of the Manchu document of the Nayoro document (No.1)





ABSTRACT

On the rare Manchu historical materials at the Library of the Hokkaido University

NAKAMI Tatsuo

Tokyo University of Foreign Studies, JAPAN

Toyo Bunko, JAPAN

In Japan, important and valuable cultural objections as like books and historical documents, are designated as “Juyo Bunkazai (重要文化財)/ an important cultural property” by Minister of Education、Culture、Sports、Science and Technology. Most of books and historical documents designmated as “important cultural property”in Japan are written or compiled in the Japanese or in Han-Chinese. In 2019, so-called “Nayoro Bunsho/ Nayoro Documents”at the Library of Hokkaido University was newly designated as “important cultural property”. The Nayoro Documents include four Qing document (two documents are written in the Manchu language) and nine Japanese documents. The Manchu documents of this Nayoro Documents are first case of “important cultural property”in Japan written in the Altaic language. Many Korean colleagues visit to libraries in Japan to research the Manchu books or materials. But I think they are little to see this The Nayoro Documents through their eyes. In this paper, The Manchu documents of the Nayoro Documents itself has its unique and strange history, I wish to introduce the Manchu documents of the Nayoro Documents briefly.

The Manchu document The Nayoro documents.(No.1),date: Twentyth of Third Month of Qian long fourty Years.From ”ilan halai ba icooha be kadalara meireni janggin(三姓副都統)”addressed to”too halai,halai da

ok'opio.(the leader of Too family)and “gašani da, Tosokurdenggi” appointing the date of their tribute to Peking. The documents is valuable historical materials relating to the connections of the aboriginals of Karafuto (樺太/Sakhalin) with Qing authorities located in Northeastern China. The two Manchu documents were transmitted by Qing authorities in 1775 and 1816. These documents had been found by the Japanese early explorers as like Mamiya Rinzo (間宮林蔵)and Mogami Tokunai(最上徳内)and then introduced to the Edo Era's Japan.

After the time of the Japan's territory of Karafuto, the Documents were preserved at the Museum of the Karafuto agency(樺太庁博物館/Karafuto-cho)in Maoka(真岡). At the Japan's defeat, anonymous Japanese secretly brought out the Nayoro Documents from Soviet's occupied Sakhalin to Japan by the Repatriation ship. As the person would recognize the value of the Nayoro Document, He asked to keep the documents at the office of Prof. Takakura, Sin'ichiro(高倉新一郎), professor of the Hokkaido Imperial University and the founder of the famous collection of Northern territories at the Hokkaido University and the forerunner of the Northern territories and the Ainu studies in that time's Japan. At the request of Dr. Takakura, The late Prof. Ikegami Jiro (池上二良) researched the Manchu documents and put English transcription of the Manchu text and wrote the Japanese translation and study of the document.

The Manchu documents of the Nayoro Documents has its unique and strange history.